

Hughes, R. (2011). 'Chapter 5 Approaches to researching speech. *Teaching and Researching: Speaking. 2nd ed.* United Kingdom: Pearson ESL. pp. 114-122.

## 5.1 Introduction

- スピーキングの調査において質的調査や量的調査など、研究方法を取捨選択することは研究テーマ、データおよび結論の関係性を理解するうえで重要である。
- 研究方法のカテゴリは質的、量的、先行の理論に基づく研究の 3 つに分けられ、相互に関係していて、スピーキングの調査に役立つものである。

### Concept 5.1 The influence of epistemological standpoint

- 応用言語学の大抵の学問分野では質的、量的調査を行うことが多いが、ごくまれに研究トピックを実証している理論について研究しているものもあり、この研究は重要なものである。
- スピーチの研究手法として量的な方法が多く、1980年代からは質的調査が支持を得て来ている。理論の構築に従事する研究者は少ない。

## 5.2 Quantitative and qualitative approaches towards researching speaking

- スピーキングの調査において量的調査は広く普及しており、様々なレベルの調査に用いられている。
- 応用言語学の全体の調査の 20%は質的調査であり、音声言語の調査に使用される傾向がある。
- 量的調査は既存のカテゴリの観点でデータを分析する傾向があり、調査者はデータ項目の性質を調査する。また、形式の内面を明らかにすることも量的調査の強みである。
- スピーキングの調査において、質的調査は会話分析に広く用いられ、言語資源を話者がどのように用いているかを分析したり、また、言語間あるいは会話背景によってどのように異なるか分析する際に用いる。
- 同じ言語現象を扱っていても量的調査と質的調査で違いが見られる。
  - ◆Watanabe *et al.* (2008)では先行研究に基づく予測および仮説から、量的調査を用い、統計により会話におけるポーズを調査した。予測通り、聞き手は話者が複雑な表現を用いる前にできるポーズを埋めるということが提唱された。
  - ◆Mushin and Gardner (2009)では会話分析が用いられ、アボリジニとオーストラリア白人のポーズの使い方の違いが調査された。リサーチクエスションや仮説の調査というよりもむしろ、修辞疑問文を出発点とした調査である。

### **Quote 5.1 Using rhetorical questions to show research focus**

➤アボリジニの会話は間をあける傾向があるが、オーストラリアの白人との会話スタイルの違いによるものである。しかしアボリジニの会話方法についてあまり理解されていない。長い間を持つことがアボリジニの会話スタイルであるかもしれない。

◆間の長さの役割について理解しようと試みる中で、話者がどのように反応するかという点を観測することができた。

### **Quote 5.2 An example of a CA interpretation of interactive behavior**

➤アングロサクソン系のオーストラリア人は会話に対する反応が遅いが、ここでは問題にはならない。Mh hm という反応は話を続けるためのことばというよりも、話を終わらせるためのことばである。

➤量的調査ではデータに基づいて仮説を検証するが、会話分析では参加者による会話中の言語資源について扱われる。また、質的調査では会話中に現れる重要な特徴を分析することができる。

### **5.3 Theory-driven, positional, or ideas-based approaches to researching speaking**

➤すべての調査は理論や見解に基づいて行われるが、理論に対する問題や他の理論の可能性について調査する研究もある。Lieberman (1998)は position paper として知られている。

### **Quote 5.3 Lieberman's main research question**

➤ライティングやリーディングよりを越えた生物学的な利点である発話能力はどのように進化したのか。発話の理論、あるいは言語の理論は、この問題を回避することは可能であるが、答えを示唆することは不可避である。発話の重要性について答えられなければ科学者は誤った理論について熟考するべきである。

➤position paper では、しばしば既存のパラダイムに異議を唱える傾向にあるが、既知とされているものや、基準を満たしていないものを選んでいく。

➤Lieberman は自身の「スピーキングはライティングよりも容易である」という仮定に関して議論していないが、彼の主張は一貫している。

➤彼の考察は、理論に対する厳しい批評としての、また批評の枠組みとしての基礎となり、発話処理の研究に影響を与えた。

➤また、彼の考え方は発話処理の分野以外に、失読症や言語発達の分野などの多様な分野に関係している。

#### **Quote 5.4 The lasting resonance of a theory-driven paper**

- Liberman は理論的立場を批判する教義上の主張を展開しているが、科学において教義上の主張は異常なものであり、また、この主張では話し言葉と書き言葉の関係について言及するには不十分である。
- 科学の高水準を保つためにも教義上の立場は避けるべきであり、教義上の主張は因果関係の仮定をしない、話し言葉と書き言葉の作用に関する研究に用いられ得るものである